

由良 浅次郎

平成 21 年 1 月末現在

明治 11 年 (1878) ~ 昭和 39 年 (1964)

和歌山市生まれ

合成染料・有機化学中間体の国産化に成功した郷土和歌山が誇る日本有機化学工業の先駆者

由良浅次郎(由良翁)は、明治 11 年(1878)、1735 年創業の徳川紀州藩御用商人表紺屋「日高屋」を廃藩置県まで営んでいた紀州フランネル創業者の由良儀兵衛の三男として和歌山市に生まれ、明治 38 年(1905)、大阪高等工業学校(現:大阪大学)を卒業しました。その後由良翁は、紀州フランネルの近代製造を目的として自家発・ボイラーを備えた和歌山で初めての近代工場を持ち、大阪・熊本鎮台はじめ海軍省の御用を拝し、由良翁の兄弟 5 人が明治 24 年(1891)、に興した「由良兄弟色染会社」(当時和歌山市 12 番丁 6 番地あたり)を家業として継ぎました。又明治 31 年、正 5 位勲 4 等野村政明和歌山県知事から本県物産共進会席上、協賛賞を授与されました。

その後大正 3 年(1914)、第一次世界大戦が勃発し、ドイツからの合成染料の輸入が途絶えました。全てを輸入に頼っていた本邦染料業界は混乱し、国内の染色加工業は休止の危機に直面しました。そのような状況下、進取の気性に富んだ由良翁は、合成染料の主原料であったアニリンの合成製造を決意。1ヶ月余り合成実験を繰り返し、実験室での高品位のアニリンの取得に成功しました。日本での工業化は不可能と勧告する者も多かった中、当時ドイツでしか製造技術のなかったアニリンの原料となるベンゾールの精留装置を設計し、純ベンゾールの精製に成功、さらに試行錯誤を経ながら苦心の末、引き続きアニリン製造装置を完成させ、日本で初めてアニリンの工業的製造に成功しました。

同年、由良翁は、由良精工合資会社(現:本州化学)を設立。続いて大正 4 年(1915)、には医療界で欠乏していた消毒用フェノール(現:ポリカーボネート樹脂用ビスフェノール・フェノール樹脂の原料)の合成にも日本で初めて成功し工業生産を開始しました。

大正 6 年(1917)2 月、由良精工から商権を移転された由良染料株式会社(現:ワイ・エス・ケー)が設立され、同年開催された化学工業博覧会に出品した染料が金賞牌を受賞、染料中間化合物が銀賞牌を受賞するなど、優れた技術力で化学工業界を先導、和歌山は合成染料の発祥の地として、急速な発展を遂げることとなりました。

大正 13 年(1924)、由良染料(現:ワイ・エス・ケー)は、海軍艦政本部の命を受け、日本海軍主力爆薬としての下瀬火薬(ピクリン酸)製造を新たに岡山県玉野市の地に於いて開始し、八八式、一式爆薬を海軍の増産要請にもよく応え納入し、報国 297 号を手始めに 96 式艦上戦闘機 21 機の献納も行いました。

その後、由良精工・由良染料(現:ワイ・エス・ケー)は、上場系大手化学会社の日本触媒、準大手スガイ化学工業や多くの地元和歌山市小雑賀周辺化学工業製造会社の設立者を数多く輩出することとなりました。

然るに由良翁は、日本で最初の有機化学工業会社の由良精工を引き継いだ現:本州化学はもちろん日本を代表する花王和歌山工場設立の際にも絶大なる協力をし、地元和歌山県化学工業界七十数社の先駆者として名を馳せることとなり、今や石油について 2 位の化学製品(染色、油脂、界面活性剤、繊維、医療、農業、電子など幅広い分野)3,700 億円(2004)の県製品出荷額の礎を築きました。

一方、由良翁は、現:和歌山工業学校、文教高等女学校(現:明正中学校)、光華学園(京都)の設立や戦後県への学校法人そのものの寄付を行い、地元和歌山の地域の教育の振興にも多大に貢献しました。

我が国の染料・有機化学工業発展に始祖として多大な功績を残した由良浅次郎は、昭和 39 年(1964)、86 歳で亡くなりました。

この間、これらの功績により、文部大臣賞、日本海員救済会より一等有功章等々、海軍大臣よりからの数多くの表彰、戦後日本赤十字社から感謝状、昭和 29 年(1954)産業教育 70 周年に文部大臣より表彰、昭和 31 年(1956)和歌山市より表彰状、昭和 36 年(1961)12 月総理大臣官邸にて藍綬褒章、昭和 39 年 3 月天皇陛下より従 5 位勲 4 等瑞宝章等々数多くの褒章を授与されました。